

新規設立 農業法人の概要集 Vol.4

～フロントランナーを目指して～



令和3年1月

鳥取県農業経営者サポート協議会

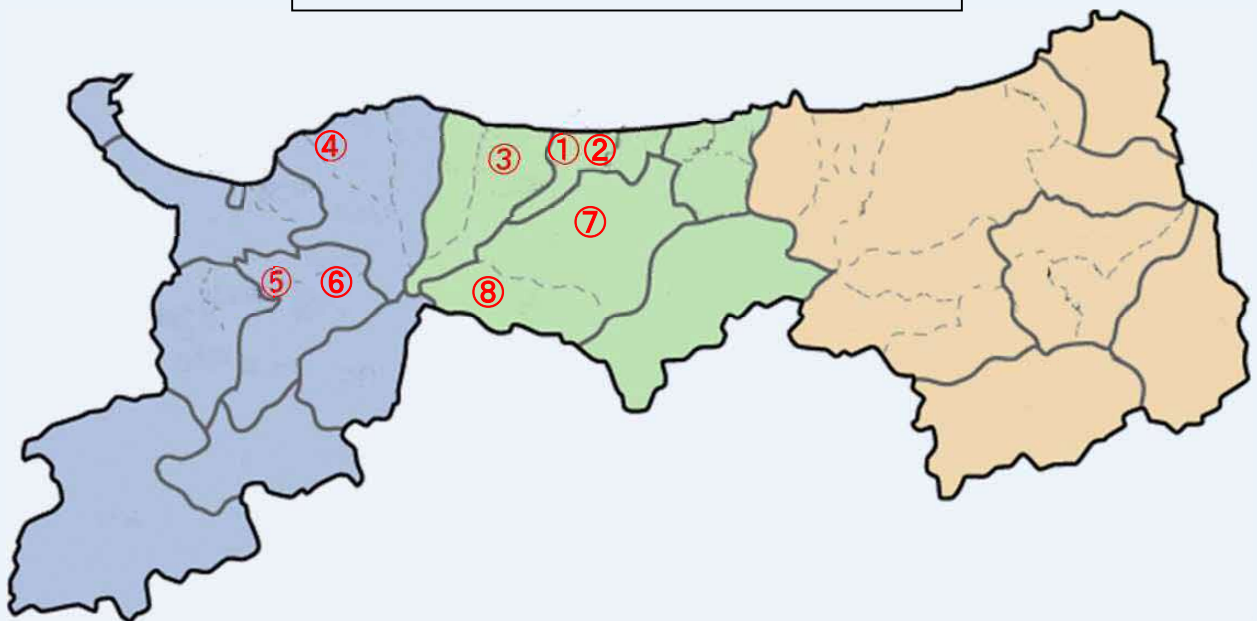
I N T R O D U C T I O N

少子・高齢化が進み、生産年齢人口の減少等を背景にした人材確保の問題は、我が国全ての産業において顕在化し、今後更に深刻化することが懸念されています。

農業分野においても、農業経営者の高齢化、後継者の不足、遊休農地の増加など、先行きが不透明なことは確実です。しかしながら、このような時代だからこそビジネスチャンスと捉え、しっかりとした経営理念をベースに足腰の強い農業経営を築き上げることで、この逆境の時代を乗り越えようと生業からビジネスへステップアップしたたくましい農業法人達があります。

本誌では、令和元年度に鳥取県内で農業に夢と希望を抱き、トップランナーを目指して農業法人を立ち上げた8法人のうち6法人にスポットを当て、その経営理念、目指す農業経営などを掲載し紹介しています。経営者の考え方や行動が、法人経営を目指している農業者の方の参考になれば幸いです。

新規設立農業法人の所在地



CONTENTS

新規設立農業法人紹介

新規農業法人一覧 2

①(株) Agriすぎかわ 東伯郡北栄町..... 3

②(株) PEE・FARM 東伯郡北栄町..... 4

③Earth grace (株) 東伯郡琴浦町..... 5

④(株) andAgri 西伯郡大山町..... 6

⑤(農) 父原 西伯郡伯耆町..... 7

⑥(農) 大山五人衆 西伯郡伯耆町..... 8

とっとり農業経営相談所について

とっとり農業経営相談所の概要 1 0

農業経営相談所への申込手順 1 2

支援活動体制 2 2

その他の支援活動 2 4

経営理念等

1 先人が育てた大栄
西瓜ブランドを拡大し、
その恩恵をつなぐ

2 農地をいかして、生
産性を高める



データ

- ・設立 令和元年10月
- ・所在地 北栄町大谷 3742-1
- ・主な作目 西瓜 1.8ha、花き(トウモロコシ等) 1.2ha、ジャワ 20a
- ・代表者名 杉川 将登
- ・従業員数 6名、パート1名
- ・資本金 300万円

(株) Agri すぎかわは、北栄町大栄地区で地域の特産品であるスイカとストック等の切り花を中心に施設栽培を行っている。

農家の高齢化が進んでおり、今後農産物の高値は望めるが、今後どのように安定した経営を行っていくのか。そのためには、良い人材に安心して就労してもらえる環境を提供する必要があり、社会保障を充実させるためにも法人化を考える様になった。5年前に長女が就農し、将来、後継者に経営を繋いでいくことを考えた時にその思いは一層強くなり、経営相談所の専門家（司法書士、社会保険労務士）や税理士に相談しながら、令和元年10月に法人を設立した。



代表取締役の杉川将登氏は、大栄西瓜組合協議会長を平成24～29年まで6年間勤めた。同地区の西瓜栽培面積は高齢化にともない年々減少傾向にあるなか、会長職を経験し、自分のすべきことが明確になった。それは、「先人から受け継いだ技術とブランドのバトンを次の人に渡していくこと」。そのことを考えると、面積を作っていくことが大切であり、西瓜栽培に取り組む人を増やしていくために

は、自分も面積を増やしていき手本となっていく必要があると思っている。

西瓜やストックは大栄ブランドが確立されていて農協に出荷しているが、自分のオリジナルカラーは見えにくい。自分で考えてできる部分として「花」を楽しみながら栽培している。これまでに販売に苦慮した経験もあるが、消費者ニーズを掴みながらトルコギキョウ



ウ、ダリアなどを市場出荷している。

法人化して良かった点としては、「経営」がこれまでよりも明確化したこと。労力軽減のための機械導入や従業員の福利厚生（シャワーの設置など）に投資していくことも重要だと考える様になり、また、社会保障のしくみも勉強できた。令和2年10月には1期目の決算も税理士の指導を受けながら代表自身が取り組んだ。

今後の課題は、更なる規模拡大と従業員の確保。一人一人が役割を持ってワクワクできる取り組みも行っていきたいし、関わる人に喜んでもらえる様な会社にしていきたいと考えている。

(執筆：東伯農業改良普及所)

《代表者のひとこと》



【杉川代表取締役】

地域の農業を大切にしながら、従業員に働いてよかったと思ってもらえる会社にしていきたいと思います。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積

年度	地目	面積(m ²)
R1	田	—
	畑	—
R2	田	—
	畑	—
計		—

《農業委員会からのコメント》

経営の効率化をはじめ、情報発信も積極的に行われており、地域のリーダーとして活躍されています。法人化により、更なる規模拡大と地域農業のモデルとして活躍されることを期待しています。

人と人とのつながりを
大事にして、美味しい野
菜を生産します。

経営理念等



データ

- 設 立 令和2年3月
- 所 在 地 北栄町大谷 1442
- 主な作目 スイカ 215a、ホウレンソウ 200a、ブロッコリー 120a、中玉トマト 6a
- 代表者名 梅津博文
- 従業員数 5名、パート5名
- 資本金 500万円

様々な品目を試行錯誤で栽培して取捨選択し、ハウスの増設、雇用の確保を行って規模拡大した結果、スイカとホウレンソウを基幹とし、ブロッコリーと中玉トマトを補完品目とする現在の経営にたどり着いた。規模拡大には、どうしても雇用確保が必要であり、そのためには福利厚生等の雇用環境の充実が必要であることを痛感していた。



そのような折、次女が東京の農業経営専門の学校に進学し、そこで縁あって研修させて頂いた、女性農業経営者の経営姿勢や考え方に刺激を受け、法人化について具体的に考えるようになった。その頃、普及所から農業経営相談所の話聞き、法人化を視野に入れて申し込み、専門家との相談を通じてその利点を確信し、令和2年3月に法人化した。



法人化したメリットはまだそれほど実感は無く、事務量が予想以上に増えたが、従業員は福利厚生が充実されたことを喜んでいる。



北栄町は各生産部が非常にしっかりしていることから、現在は、スイカを初めとして各品目とも高単価が維持できており、生産・販売環境は非常に良く、野菜は全て農協出荷しているが、このような状態が続くためには、現在の産地規模を維持する必要がある。しかし、現状維持を考えているだけでは、生産者の高齢化による先細りが見えている。時代の変化に取り残されないように、古い考えにとらわれず、常に新しい考え方・取組を産地全体で進めていくことが、産地の維持に繋がると考えており、将来的にはより有利販売を行うため、個人出荷も検討中である。また、次女の研修先の女性経営者には、北栄町で令和元年に講演して頂く等、農業では人と人とのつながりが非常に大切であることを実感しており、今後もそのような思いを胸に、経営発展に取り組みたい。

(執筆：東伯農業改良普及所)

《代表者のひとこと》



【梅津代表取締役】

これからも、従業員の事を第一に考えた経営をしていきたい。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積

年度	地目	面積(m ²)
R1	田	—
	畑	—
R2	田	—
	畑	—
計		—

《農業委員会からのコメント》

農業経営のみならず、地域の取り組みに対しても、常に情報を収集し、積極的な農業経営の改善を行っておられます。今後、より一層、地域農業の発展、活性化の見本になっていただけることを期待しています。

経営理念等
農業であらゆる困難
を超えていく会社です。
美味しいものは人を
笑顔にします。その笑顔
の花を全国で咲かせる
事が私たちの使命です。



データ

- 設 立 令和2年3月2日
- 所 在 地 東伯郡琴浦町逢束
- 主な作目 ブロッコリー
- 代表者名 寺岡 昌一
- 従業員数 9人
- 資 本 金 300万円

Earth grace 株式会社は、鳥取県中西部に位置する琴浦町で、ブロッコリーを中心に、トマト、スイカを経営の三本柱として営農を行っています。

代表の寺岡昌一さんは、もともと県外で農業とはまったく関係のない仕事に就いていましたが、奥さんの実家がある琴浦町に1ターンし、平成20年から1年間、公益財団法人鳥取県農業農村担い手育成機構のアグリスタート研修一期生として学ばれ、平成21年に就農されました。その後は琴浦町で営農面積を徐々に拡大され、農協の他、インターネットでの販売も行われています。さらに、近年は琴浦ブロッコリー生産部の部会長として活動されたり、耕作放棄地を新たに整備し直したブロッコリーの栽培にチャレンジされる等、地域の担い手として活躍されています。



もともと、寺岡さんは経営方針として、人の雇用を前提とした営農を目指しておられ、雇用を増やすことで面積拡大が可能となり、さらなる雇用を増やすことで、耕作放棄地

の作付依頼も積極的に受けてられました。しかし、平成30年頃から他産業との競合等により人材の確保が困難となり、確保できても、定着率が低いため、技術習得が進まず、将来設計が立てにくい状況となりました。そこで、補助事業等を活用した作業場兼休憩室やトイレの整備を行うとともに、従業員の福利厚生の充実を目指して法人化されました。



寺岡さんは、ご自身のことを積極的に地域を盛り上げていこうと音頭をとるほうではないと考えているそうです。その代わりに、法人化や環境整備による労働環境改善や、農作業の機械化等を行い規模拡大してきたこれまでの約10年間で、10年くらいでもこのくらいのことはできると、農業に夢をもつ若者に思ってもらいたいとのこと。そのためにも、理想を語るだけでなく、地域の経営モデルとなるような農業を自ら実践していきたいと考えておられます。

(執筆：東伯農業改良普及所)

《代表者のひとこと》



【寺岡代表取締役】

法人化したので、後継者育成に注力していきます。また、琴浦町で就職するならEarth graceで働きたい！と思って貰える会社に育てていきたいです。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積

年度	地目	面積(m ²)
R1	田	—
	畑	—
R2	田	—
	畑	106,981
計		106,981

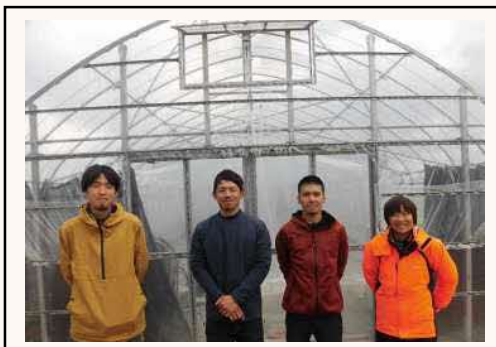
《農業委員会からのコメント》

個人経営の頃から、規模拡大のため耕作放棄地も意欲的に集積してこられ、法人化による更なる発展に期待します。

今後も関係機関と連携し、農地の利用集積などの支援を行います。

先人が積み上げてきたものを継承しつつ地域貢献していく。

経営理念



データ

- ・設立 令和元年7月
- ・所在地 西伯郡大山町岡
- ・主な作目 ブロッコリー他
- ・代表者名 林原 正之
- ・従業員数 3名、パート3名
- ・資本金 300万円

大山ブロッコリーを長年栽培し産地に尽力してきた両親の元、平成28年に林原代表は親元就農された。農業を手伝ったことはなく、親から継げとも言われなかったが、地元が好きで大山町で仕事をしたかったこともあり、大学在学時に就農を志向。卒業後は一旦、地元青果市場に就職して青果流通について学び、その後就農した。

就農前から、将来は雇用し規模拡大したい意向があった。また両親が借地を多く引き受けており、地権者が困らないよう継続管理したいと考えていた。

就農後は経営継承に向けた準備をしながら、周囲でも法人化していくのを目の当たりにし、産地が高齢化していく中で今後受け皿となるのは法人などの大規模経営体であると考えた。そして令和元年7月に株式会社を設立。同時に経営者も両親から子へバトンタッチした。

社名「andAgri」の由来は、地域とのつながり。両親、生産部、JA、行政など先人たちのこれまでの尽力があり、その上で今の農業ができています。“両親や先人が産地・地域を築き上げてきた意志を継承する。”それを忘れないように、という思いを込めて命名した。



林原代表と両親に加え、令和2年から新たに青年3名を常時雇用し、現在ブロッコリー17ha、水稲50aを栽培。雇用増に応じた作業・収入の周年化と農地受け皿としての規模拡大を見据え、新たな品目（コーン、カボチャ、ホウレンソウ、ミニトマト、オクラ等）を試作しており、複合経営確立を目指している。規模拡大しながらも経営分析を行い、経営マネジメントにも努めている。

令和元年にはJGAP認証を取得。両親のこれまで積み上げてきた貴重な暗黙知を見える化し、従業員教育に役立てている。課題は人材育成であり、目標を立てて意欲を高めさせるなど教育に取り組まれている。



今後は作業省力化のため、共選施設の利用や新たな土地利用型作物の栽培に興味を持っている。さらに、農地だけでなく、地元の方など雇用の受け皿となることも考えている。

「規模拡大していくが地域で独りよがりなことはしたくない」と話す。次の世代を担う、謙虚で経営力の高い林原代表に期待したい。

(執筆：西部農業改良普及所 大山普及支所)

《代表者のひとこと》



【林原代表取締役】

産地や栽培技術、ブランドなど両親や先人の積み上げてきたものを引き継ぎ、地域の農地や雇用の受け皿となって地域貢献していきたい。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積

年度	地目	面積(m ²)
R1	田	—
	畑	—
R2	田	37,914
	畑	22,796
計		60,710

《農業委員会からのコメント》

親元就農から法人化され着実に規模を拡大してこられ、地域からの信頼も厚く、また、JGAP認証を取得するなど先進的な取り組みをされています。

今後も地域農業のリーダーとして活躍されることを期待しています。

経営理念等

- ・耕作放棄地を出さない。
- ・地域の自然と農地・社会を守る。
- ・農地を生かしながら先祖伝来の農業環境・風土の維持・保全を図る。



データ

- ・設立 平成31年4月
- ・所在地 伯耆町父原
- ・主な作目 水稲、そば
- ・代表者名 一橋 信介
- ・従業員数 理事5名
- ・資本金 40万

米子市から国道181号線を溝口方面へ向かい、県道46号線に入ると、大きな鬼のオブジェがあるおにっ子ランドです。その鬼の眼下を2.5kmほど南へ進んだところに伯耆町父原集落があります。

その父原集落に、平成31年4月に設立されたのが「農事組合法人 父原」です。

前身の任意組織である「父原集落営農組合」（平成27年設立）を運営する中で、近隣からの耕作依頼があっても農地集積して営農できない等の法的地位の不安定さを、役員皆が感じていました。その思いがきっかけとなり、地域からの信頼度も上がる、耕作依頼を受けられる法人化をしようという機運が高まり、(農)父原の設立が実現されました。

法人の基本方針は、「利益を確保しながら地域を守る」ことです。集落の農地所有者の全員が構成員であり、集落の全員で頑張っていこうというのが、この法人の最大の特徴です。

法人化した現在感じることは、集落の法人として認知されていること（同時にそう自覚しなければならない）。周りからの信頼度が高く任意組織とは数段違う（農地耕作の依頼が多くなった）。社会的責任を痛感する（税金等）ことです。

現状は、従来の個人経営を踏襲しつつ、組織経営への移行期であり、個人の保有機械や意欲を活用しながら協業化を推進すべく検

討を重ねています。

経営は、水稲とそばが主体で、令和2年度は、水稲8.5ha、そば2.5ha、計11haの作付でした。

水稲では、新品種「星空舞」の栽培を始めており、集落内に実証試験ほ場も設置して取り組んでいます。「きぬむすめ」の作付が増え過ぎ、収穫時期が繁忙となっていることから、作期分散ができる「星空舞」の今後の増反を計画しています。

法人の中心メンバーである現在の理事5人の年齢は60代後半から70代後半（平均年齢70歳）です。今後は、集落の農業従事者の高齢化により、労働力の減少が目前に迫っていることから、いかに若い構成員と収入の確保をしていくかが課題です。

誰をも受け入れ包み込む雰囲気の一橋代表と、堅実に経理事務を行い代表をしっかり支える橋田理事の固い絆が、集落の団結力を引き出しており、今後の発展が楽しみです。



共同作業の様子

（執筆：西部農業改良普及所）

《代表者のひとこと》



【一橋代表理事】

農業者の減少、高齢化、後継者不足、不耕作地の増加などの課題を踏まえ、農作業の効率化を図ることで生産性の向上と合理的な農業を継続していく「地域の農業は地域で守る」を合言葉に今後もしっかりと対応していきたい。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積

年度	地目	面積(m ²)
R1	田	85,077
	畑	20,684
R2	田	—
	畑	—
計		105,761

《農業委員会からのコメント》

理事を中心にまとめた法人というのが、農事組合法人父原の印象です。後継者・担い手不足などの難しい問題にも前向きに取り組んでおられ、持続可能な営農体制を築いてほしいと思います。

経営理念等

- ・ 私たちは、中山間地域である金屋谷集落の農地を守ります。
- ・ 私たちは、安全・安心で美味しい食材を食卓に届けます。
- ・ 私たちは、健全な農業経営で儲かる農業を次世代に引き継ぎます。



データ

- ・ 設立 平成31年4月
- ・ 所在地 伯耆町金屋谷
- ・ 主な作目 水稻、白ねぎ
- ・ 代表者名 入江 康之
- ・ 従業員数 理事5名
- ・ 資本金 50万

米子方面から国道181号線、県道45号線を経由し、米子道溝口インター入口を左に見て直進すると、正面に、雄大な「伯耆富士」とも呼ばれる秀峰「大山」が見えてきます。

そんな素敵な環境の伯耆町金屋谷に設立されたのが「農事組合法人 大山五人衆」。

天草五人衆、大坂五人衆など数々あれど、「大山五人衆」は、ここ地元金屋谷集落の農業の維持発展を目指し集まった五人組クイントです。

金屋谷集落では、とある肥料会社から海藻肥料の活用の相談があったことから、平成24年に水稻の試作をしました。その結果、驚くほど美味しいコメが獲れたことから、仲間を募り本格的に「海藻米」の栽培が始まりました。

その後、金屋谷では集落の農業従事者の高齢化が進み、自分で田の管理ができなくなる人が増えてきました。その受け皿となる組織が必要だと平成30年秋頃から普及所や関係機関と話し合い、法人設立の検討が始まりました。農業経営相談所に相談し専門家の助言を受けながら話し合いを進め、平成31年4月に「農事組合法人 大山五人衆」が設立されました。

法人化した考えとして、個人個人の投資を低減させること、地区の荒廃地を増やさないことが大切な観点であると考えています。

「海藻米」のブランド化を図りながら、町が振興している白ねぎを導入し、金屋谷集落を

中心とした活動エリアで営農することとしました。

海藻肥料を使うと、ねぎは太く甘くなり、コメも甘くなるとのことで、令和元年の県水稻食味コンテストでは、見事に優秀賞に輝くなどブランド化へ向けて実績を積み重ねています。肥料コストが掛かるなど課題もありますが、堆肥等も活用し地力増強を図りながら鋭意、努力していく方針です。

現在は、水稻と白ねぎを主体とした経営ですが、積雪のある端境期の収入減を補う方を農協や普及所に相談したところ、今年度からハクサイの試作に取り組むこととなりました。

今後の課題は、後継者の確保、育成ですが、法人の門戸は広げておき、退職後あるいは退職前から法人に加わりたい農業者があれば受け入れることとしています。

「大山五人衆」のメンバーの結束力、固い絆と併せ、はにかむ笑顔の中に、しっかり将来を見定めているように輝く、入江代表の瞳が印象的です。

(執筆：西部農業改良普及所)



《代表者のひとこと》



【入江代表理事】

地区のほ場を荒らしてはいけないとの思いで、有志5名全員が60歳以上からの挑戦。

スローガンは『地区の農地を守り、安心・安全で美味しい食材を食卓に』。

今後の課題は、後継者に引き継ぐために農作業の省力化と儲かる農業。

《農地中間管理事業の活用状況》

農地中間管理機構との契約面積

年度	地目	面積(㎡)
R1	田	881
	畑	—
R2	田	—
	畑	—
計		881

《農業委員会からのコメント》

金屋谷のほ場は、いつも管理が行き届いていて、農業の面だけでなく、観光の面でも一役買っているものと思います。

今後も引き続き農地を守っていただきながら、儲かる農業を目指して頑張りたいと思います。

鳥取県農業経営者サポート協議会

事務局：(公財) 鳥取県農業農村担い手育成機構

〒680-0011 鳥取市東町一丁目 271 番地 県庁第 2 庁舎内

TEL：0857-26-8337 FAX：0857-29-4867
